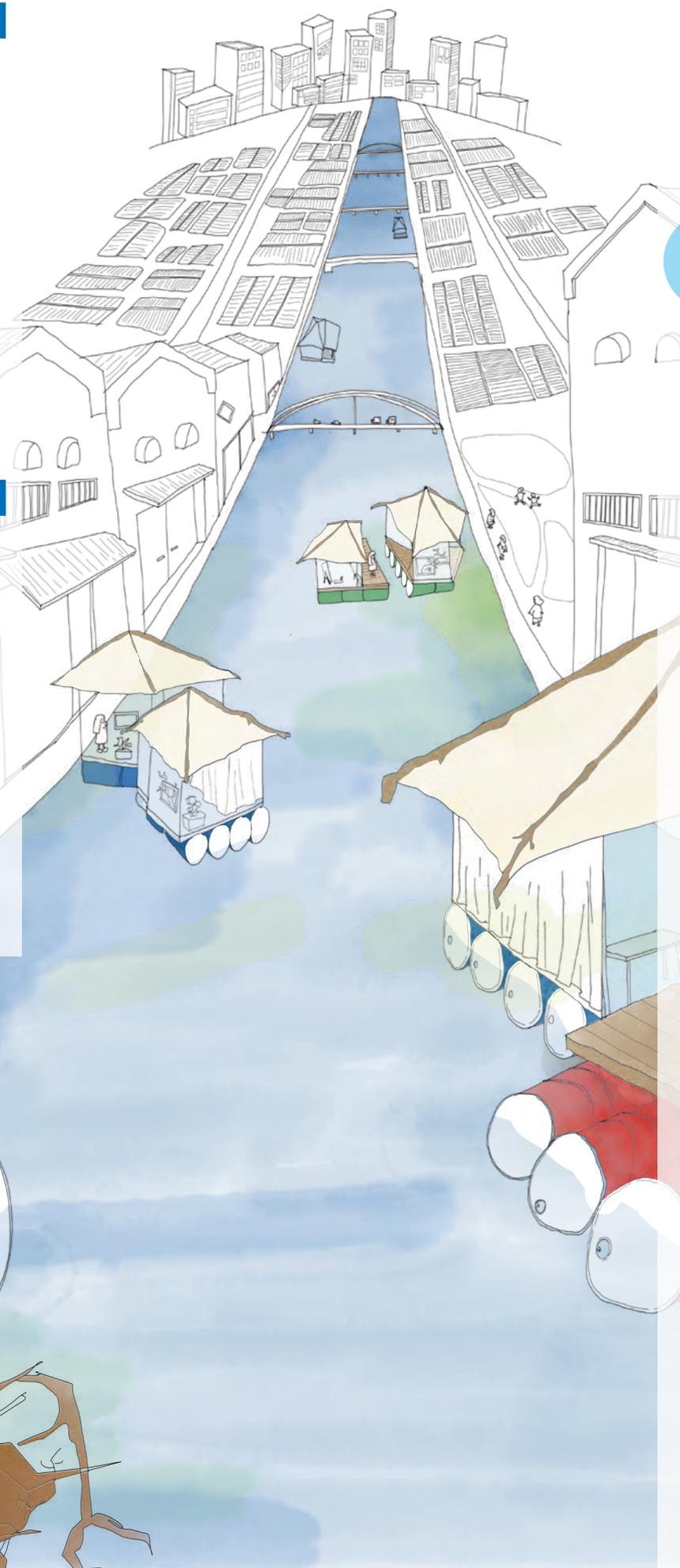


運河を塗り変える

かつて水運物流によって栄え、人々と共生しながら佇んでいた中川運河は、時間が経つことで運河と人々の距離が離れてしまった。しかし水運の衰退により静けさや独自の生態系を獲得したことで、人々の感性を養うことのできる可能性を秘めている。現在創出されつつあるにぎわいは人々の活動拠点を作り出しているが、運河の可能性を引き出すことが出来ていない。中川運河の流域に浮かぶギャラリーとアトリエを造ることで、運河の可能性を引き出しつつ、人々と水辺空間の距離が近づいていく。中川運河の可能性を引き出した新たな水辺空間を造り出すことを目指す。



01 中川運河に秘められた可能性

中川運河は水運物流によって栄えており、水と共生しながら人々が活動していた。

しかし、水運の衰退により中川運河は静けさを獲得し、人々が護岸に立ち入らないことで独自の生態系を持つ場へと変化した。

このような変化により、中川運河は人々の感性を養うことのできる可能性を秘めている。

02 運河を漂う浮舟

アーティスト・イン・レジデンス



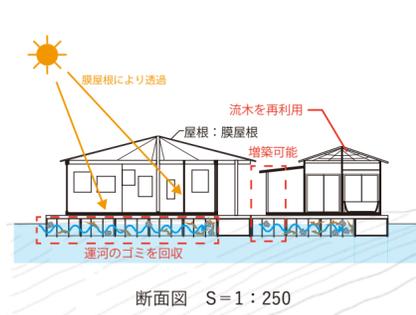
アーティストが暮らしながら製作することが出来るアーティスト・イン・レジデンスの機能を持つ浮舟を提案する。

浮舟はギャラリーとアトリエ、二つの属性を持つ。ギャラリーは護岸沿いに停留している。アトリエは移動可能であり、製作と展示を自由に行える。

運河の非日常性は、作家にとってアイデアの糧となり、また都市を南北に横断する運河を浮舟で自由に移動できることがさまざまな人々との関わりを可能にしている。

03 環境装置としての浮舟

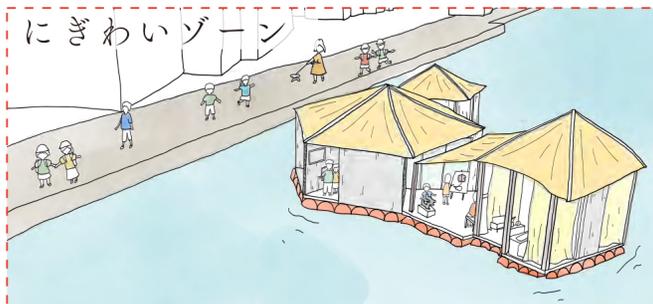
浮舟は余ったドラム缶により浮上しており、運河上に散らばるゴミ、流木を回収できる環境装置としての機能も備えている。回収したものは作品や建材へ転用される。



04 中川運河の新たな到達点

人と運河・水辺空間を繋げることは、人と人、人と産業だけではない。新たな関係性を生んでいる。

既存のにぎわい創出だけではなしえない、人々の感性を養うことのできる可能性を引き出した水辺空間は、中川運河の新たな到達点と言えるのではないだろうか。



にぎわいゾーン
ギャラリーとアトリエが渡し舟となっており、付近の小学生の通学路となっている。



もものづくりゾーン
3組の作家が1つのギャラリーへ集まり、光あふれる空間で展示を行う。



ものづくりゾーンでは、ドラム缶を利用したアトリエの増減築を行う。



回収した運河ゴミを分別し、貯めておく。作家は作品に使う分だけで取って置く。



レクリエーションゾーン
このエリアは水面との距離が近く境界が曖昧であるため、ギャラリーから椅子を伸ばす。



ギャラリーとアトリエが接続し、外部空間の水辺と風を感じる場にも作品を展示できる。